

① 自らのアイデアで楽しく伝える「広告」の仕事

元高校生保護者

今回は皆さんに「広告」の仕事をご紹介します。

皆さんはテレビ、インターネット、新聞、看板など、いろんな所で広告を見ていると思います。広告はいろんな企業(団体)が、商品やサービスの内容を一般の人に伝えるものです。

時にはタレントを使ったり、面白い内容にしたりして、注目を集めています。そうすることでより多くの人に、自分たちが作った商品などを知ってもらうことができます。

世の中から広告がなくなるとどうなるでしょう？

今、どんなものがはやっているのか、バーゲンはいつからはじまるのか、近くに病院があるのか、など皆さんが知りたいと思うことを知る機会がとても少なくなります。広告は社会の中でとても重要な役割を担っており、また経済の発展には欠かせないものなのです。

その広告をうまく作ったり、場所や時間を考えたりするのが広告の仕事です。

広告の仕事は、大きく分けて「メディア(媒体(ばいたい)社)」と「エージェンシー(広告代理店)」に分かれます。メディアはテレビ局や新聞社、雑誌社などで、最近ではヤフーやグーグルなどもメディアに分類されます。エージェンシーは電通、博報堂などの大企業から小人数で経営している中小企業まで数多くあります。

メディアの人は、どのように自らの媒体(ばいたい)に広告を入れればいいかを考えます。例えばテレビ局の場合ほどの時間に広告(CM)を流すか、広告料金をいくらにするか、どのような広告をいれるか、などを考えます。

エージェンシーの人は、各企業がどのようなメディアで広告すればいいか、どのような内容の広告を作ればいいかを考え、広告をする企業に提案します。当然いろんなエージェンシーが提案するので、勝ち負けがあります。企業側の人から「おもしろい!」と思われたエージェンシーの広告が採用されます。今、世の中にある広告のほとんどは、こうやって競争して勝ち残ったものです。

広告の仕事のいいところは、メディアであれエージェンシーであれ、自らのアイデアが活かされる点にあります。広告の内容を考える点においては、アイデアは無限大にあります。

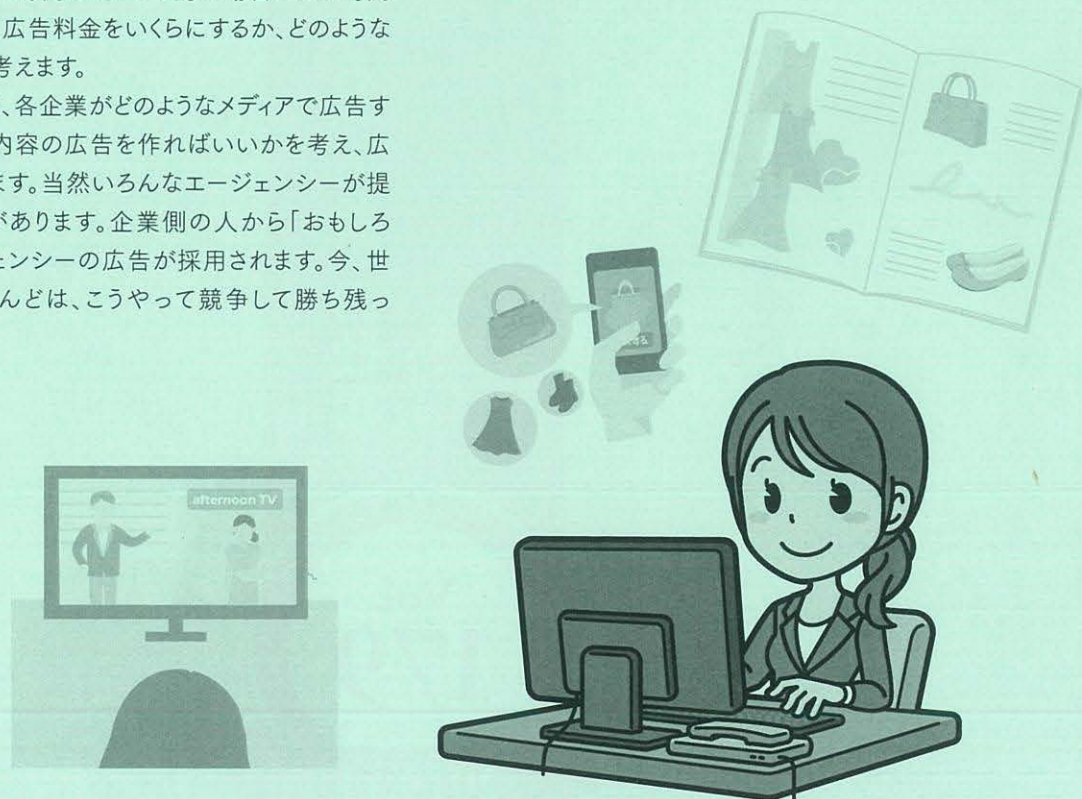
どのようなタレントを使うか、場合によっては動物を使ってもいいし、漫画の主人公でもいいです。予算(費用)には限界がありますが、アイデアはいくらでもあります。また、どのようなストーリーを考えるか、デザインはどうするか、かっこよくするか、楽しくするか、まじめにするか、考え出したらきりはありません。

その時に大事なのは、「人の真似(まね)は絶対にしないこと」です。自らが考えたアイデアで、企業の商品を紹介する。このことが広告作りにとって、とても大事なことであり、また楽しい点でもあります。

広告の仕事に関わった人は、自らが作った広告にいろんな人が接しているのをみて、とてもうれしく思う時があります。自らのアイデアで見る人を楽しませ、その結果企業側の人にも喜ばれる。このことが広告の仕事の一番楽しいところでしょう。

人を楽しませることが好きな人。自分のアイデアで人と違うことをやってみたいと思う人は広告の仕事に向いています。職業選びのひとつに考えてみてください。ただし、これからは日本国内だけではダメです。世界が舞台になるので、英語だけはしっかり身につけておくほうがいいでしょう。

皆さんがいい仕事に出会えることを願っています。



② 建物に命を吹き込む仕事

吉田勘哉

皆さんの家での生活をちょっと想像してみてください。

もし、水が出なかったら？ 照明がつかなかったら？ エアコンが無かったら？

確かに屋根や壁があれば雨・風はしのげますが快適な生活とはいえませんね。

また、学校やショッピングモール、病院や映画館で考えてみても電気や水道が無ければ使い物になりません。そして、暑さ寒さをコントロールするエアコンや空気の状態をきれいに保つ仕組みも快適に建物を利用するには不可欠です。

わかり易い例で言うと、建物を人間の体に例えると、皮膚や筋肉や骨は建物で言うところの屋根や柱や壁に当たり、神経や血管は、電気や水道に相当するといわれています。

そして、心臓や肺といった内臓は、水や空気を動かす機械の役目を担う重要な機関となります。皮膚や筋肉だけあっても神経や血管、内臓が無ければ生きていけませんよね？

この無くてはならない「水・電気・空気」を人が快適に過ごせるように仕組みとして造り上げていく事が「建築(けんちく)設備(せつび)の施工(せこう)管理(かんり)」の仕事です。

建設業では、「造る」事を「施工(せこう)する」と言います。

そして、施工には色々な役割の人が携わることになります。大きく分けて、「1、どんなものを施工するのか？」そして、「2、どのように施工するのか？」が重要になります。

「1、どんなものを施工するのか？」では、建物を何に使うか？から始まり、どこにどれくらいの大きさの物を建てるのか？それはいくらお金がかかるのか？いつ使い始めるのか？を決めていかなければなりません。この一連の仕事を「設計」と言います。

設計者は、たくさんの知識と情報を駆使してプランを練り上げて設計図を作成します。そして、その設計図を基に、いくらお金がかかるのか？を計算します。

計算をして「見積書(みつもりしょ)」という書類を作成するのですが、「見積書」とは「施工するのにこれだけのお金がかかりますよ」といったことを示すための書類です。お金を出す人、払う人を「お客様」とか「顧客」とか言いますが、建設業では、「施主(せしゅ)」と呼びます。独特の呼び方ですね。

施主は、設計者から提示された設計図や見積書について、自分の思い描いている建物なのか？建設費用は予算内か？を確認し、万が一そうでない場合は、設計者に再検討を依頼します。そういったやり取りが何回も行われ、施主の思い通りのプランで施工が始まるわけです。

次に、「2、どのように施工するのか？」では、建設現場での「ヒト・モノ・カネ」の管理が必要になります。

建設現場では、工具を使い実際に施工する人を建設作業員と言います。そして、その建設作業員に「いつ、どこで、どんな作業をするかを指示・監督する役目の人を「施工(せこう)管理(かんり)技術者(ぎじゅつしゃ)」と言います。この施工管理技術者が、建設現場での「ヒト・モノ・カネ」の管理を行います。

日本の施工管理技術者の種類は、建築・土木・電気・管・建設機械・造園の6種類があり、施工管理技術者になるためには、国家資格である「施工管理技士」の資格を取得しなければなりません。建物は、施工管理技術者と建設作業員が強い結束力を持ち協力し仕事をする事によって無事に出来上がります。

施工管理技術者6種類のうち「電気と管」の二種類が、前述の建物を人間の体に例える話にあった神経や血管や内臓の部分、無くてはならない「水・電気・空気」の分野になります。この分野を「建築設備」と呼びます。

令和元年、日本の人口は1億2千6百万人、そのうち労働人口は6800万人です。建設業界で働いている人数は、約500万人と言われていて、その内 施工管理技術者は50万です。日本の労働人口の0.7パーセントという希少な職業と言えます。

そして50万人の中でも「建築設備の施工管理技術者」は数万人しかいません。

皆さんが常日頃何気なく利用している建物は、その形や色に注目しがちですが、利用する上で水や電気、空気といった「建築設備」が備わって初めて快適な空間となることを知っていたき、その快適空間は「建築設備の施工管理技術者」の存在が不可欠で重要になるということなのです。

そしてこの「建築設備の施工管理」という仕事は、地球上に人が存在する限りなくなることはありません。また、AI(人工知能)が発達しても取って代わられることもありません。

建築に興味があり希少な人材になりたい人にはぴったりの職業です。

